

第 24 回 甲南英文学会 定期総会・研究発表会のご案内

2008 年 6 月 5 日
甲南英文学会会長 中島信夫

甲南英文学会会員各位

本年度の総会、および研究発表会・講演会を以下の要領で開催いたします。ぜひともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

記

日時：2008 年 6 月 28 日（土） 午後 13 時 30 分より
場所：甲南大学 2 号館

プログラム

- 13:30 - 14:20 総会 (2 号館 2 階 221 教室)
議題 1 2007 年度決算報告
2 2008 年度予算案
3 その他
報告 1 編集委員会より
2 その他
- 14:30 - 16:20 個別研究発表 (各発表 30 分、休憩 10 分)
[英語学] 2 号館 2 階 221 教室 司会：中谷健太郎 (甲南大学)
「“軽”前置詞(*p*P*)随伴と sluicing 構造」
根之木 朋貴(甲南大学・非)
「that 節への格付与について」
牧 木綿子 (甲南大学・非)
- [英米文学・文化] 2 号館 2 階 223 教室 司会：安武留美 (甲南大学)
「19 世紀後半イギリス社会とブラスバンド運動—その拡大と変質—」
上宮真紀 (甲南大学・院)
司会：山崎麻由美 (神戸常盤大学)
『『荒涼館』論—自己を犠牲にする女性の美徳と不徳—』
大森幸亨 (京都光華女子大学・非)
司会：青山義孝 (甲南大学)
「John Marshall Clemens の死体解剖の理由は？：Mark Twain と父親」
和栗 了(京都光華女子大学)

16:30 - 17:50 講演会 (2号館 2階 221 教室)

司会：有村兼彬 (甲南大学)

「サステイナブルな地球と英語、そして母語としての日本語」

井出祥子先生 (国際語用論学会会長、東北大学客員教授、日本女子大学名誉教授)

講演者プロフィール

専攻は言語学、対照語用論、社会言語学、異文化コミュニケーション、英語教育。単著として『わきまえの語用論』(2006、大修館書店)、『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合』(1986、南雲堂)、『「ことば」に見る女性—ちょっと待って、その「ことば」』(1998、東京女性財団)、*Aspects of Japanese Women's Language* (1998、くろしお出版)、『女のことば男のことば』(1979年、日本経済通信社)などがあり、その他編著、論文多数。学会活動も多岐にわたり、日本言語学会、日本英語学会の他、国際語用論学会、アメリカ言語学会、ヨーロッパ言語学会会員で国際語用論学会の会長を務める。

18:00~20:00 懇親会 (5号館 カフェ・パンセ)

- * 出席・欠席の旨は必ずお知らせください。下の出欠表をご記入の上、切り取って同封の返信用封筒に入れて事務局宛てにお送りください。欠席される方は、委任状にも署名・捺印をお忘れなきよう、よろしく願いいたします。
- * 本年度の役員会は、10号館 8階準備室(L-810)にて午後 12:00 より開催予定です。役員の方は万障繰り合わせのうえ、ご出席をよろしく願いいたします。
- * なお本年も三省堂、丸善の両書店に書籍販売を行ってもらえるよう交渉中です。

-----切り取り線-----

第 24 回甲南英文学会定期総会・研究発表会出欠表

名前

総会に 出席・欠席 します。(どちらかに○をつけてください。)

研究発表会に 出席・欠席 します。(どちらかに○をつけてください。)

懇親会に 出席・欠席 します。(どちらかに○をつけてください。)

*なお総会に欠席の場合は、下記の委任状に、署名と捺印をお願いいたします。

委任状

私は甲南英文学会総会における決議事項について、一切を議長に委任します。

平成 20 年 6 月 日

氏名

印

発表要旨

[英語学]

“軽”前置詞(p*P)随伴と sluicing 構造

根之木 朋貴 (甲南大学・非)

本発表では主に前置詞句を含んだWH移動、sluicing構造に焦点を当て、Chomsky (2006)の継承体系を踏まえた上での前置詞句の派生過程を展開することで前置詞残留とその随伴現象とが随意的にみられる場合におこる様々な問題を解決することを目的とする。それに先立ち、先攻分析として前置詞句上に機能範疇(FP)を仮定するvan Riemsdijk (1978)とその主張を位相(phase)との関連で分析した北田(2007)、さらには軽前置詞句(p*P)を設定することで軽名詞句分析との平行性を主張するAbels (2003)を外観する。彼らの分析では前置詞残留現象はWH表現が機能範疇の指定部を経由すると考えるため通常のWH移動(1a-c)と、sluicing構造(2a-b)にみられる前置詞残留現象を(3a-b)にいたる派生仮定に基づき容易に説明することができる。

- (1) a. Who did John give the book to?
b. Who did John talk to Harry about? c. What day did she arrive on?
(2) a. I know he' s going out with someone, but I' m not sure who with.
b. John was talking, but I don' t remember who to.
(3) a. F-P inheritance; $[_{FP} e [_{F-\phi} [_{PP} \text{who} [_{P} \phi P \dots]]]] \rightarrow [_{FP} \text{who} [_{F-\phi} [_{PP} [_{P} \phi P \dots]]]]$
b. $[_{CP} \text{who} [_{C} \cdot \phi [_{TP} \text{---} [_{FP} \text{who} [_{F-\phi} [_{PP} t_{\text{who}} [_{P} \phi P \dots]]]]]]]]$

だが、これらの分析はBoeckx (2007) であげられるような以下(4)の前置詞随伴の例ばかりでなく前置詞の随伴が可能なsluicing構造、あるいはドイツ語、セルボ・クロアチア語などの前置詞句の残留を許容しない現象までも十分に説明できない点を指摘する。

- (4) a. I know he' s going out with someone but I don' t know [with who] .
b. Many pictures weren' t displayed at the exhibit, but I don' t know [of whom]

(4)の現象、あるいは通常みうけられるWH移動の前置詞随伴の例を説明するために、本発表ではChomsky (2006)の継承体系分析をもとに修正を加えた(5a-b)の派生過程を提案する。

- (5) a. p*-P inheritance; $[_{p^*P} \phi [_{PP} e [_{P'} \text{with} [\text{who}]]]] \rightarrow [_{p^*P} t_{\phi} [_{PP} \text{who} [_{P'} \phi \text{-with} t_{\text{who}}]]]$
b. **who** was talking $[_{p^*P} \text{with} [_{p^*} t_{\phi} \dots t_{\text{who}}]]]?$
(6) a. $[_{CP} [_{p^*P} \text{with who}]] [_{C} \cdot \phi [_{TP} \text{Peter was talking} \text{---}]]$
b. $[_{CP} \text{who} [_{C} \cdot \phi [_{TP} \text{Peter was talking} \text{---with}]]]$

(5a)の軽前置詞から前置詞の素性継承の過程はChomskyのそれと同一であるがその後の軽前置詞句指定部への移動の過程はこれまでの分析と異なる。また、指定部と主要部一致と省略・削除の一般化に関してはLobeck (1995)に従う。このようにして、指定部へのWH要素の移動のみを随意化するだけで継承体系を統一したかたちで、軽前置詞句全体の移動が生じる(6a)と前置詞が残留する(6b)とを同時に説明することができる。

最後に、本提案の帰結として、Stejepanovic (2008)の提示する様々なsluicing構造のもとで前置詞残留現象が生じ得ない様々な言語の例までも網羅できることを主張する。

that 節への格付与について

牧木綿子 (甲南大学・非)

That 節と名詞句は両者とも動詞の主語と目的語として現れることから、一見したところ同じように格付与されているように見える。しかし、両者の分布は異なる。

- (1) a. We were talking about $[_{NP} \text{Mary' s trip to Canada}]$.
b. *We were talking about $[_{CP} \text{that Mary went to Canada}]$.
(2) a. I consider $[_{NP} \text{John' s return}]$ to be fortunate.

b. *I consider [_{CP} that John came home] to be fortunate.

(1a)ではNPはaboutによって格付与されているが、(1b)のCPでは格が付与されず非文になる。同じように(2b)のCPにはconsiderより例外的格表示が行われず非文になる。

また、happy, aware, afraidなどの心理状態を表す形容詞は直接CPをその補部にとるが、NPが補部になる場合は、格付与するために前置詞が必要である。

(3) a. Neil is afraid [_{CP} that the computer will break down].

(Stowell 1981)

b. Neil is afraid of [_{NP} the breakdown of the computer].

(3)の例文では、補部は形容詞より θ 役割を付与されていると考えられるが、(3a)は(4a)に示すように、CPを話題化によって前置できないことから、CPの痕跡に格が付与されず非文になると考えられる(Stowell 1981)。前置詞から格を付与される痕跡を持つ(4b)とは対照的である。Stowell(1981)はこれらの形容詞は素性[+R]を持ち、その補部CPは、 θ 役割は付与されるが、格は付与されない特殊なものであると仮定する。

(4) a. * [_{CP} That the computer will break down]_i, I know that Neil is afraid t_i.

b. [_{NP} That policeman]_i, I think that Neil is afraid of t_i

(Stowell 1981)

また、persuadeの補部のCPもそのふるまいから、afraid, happyと同じように θ 役割は付与されるが格を付与されていないようにみえる。

本発表では、おもに、Stowell(1981)のThat節の扱いを再考し、ミニマリストプログラムの枠組みでなにが出来るのかを探っていく。

[英米文学・文化]

19世紀後半イギリス社会とブラスバンド運動—その拡大と変質—

上宮 真紀 (甲南大学・院)

工業化、都市化が目に見える形で進展した19世紀半ば以降のイギリス社会で、ブラスバンドが(とりわけ)労働者の娯楽として人気を博したことはよく知られている。1853年、マンチェスタのベルヴュー動物園で初のコンテストが開催されたのを皮切りに、これをひな型としたコンテストが各地に拡大し、それに刺激されてイギリス全土で、なかんずく北部イングランドでは、ブラスバンドの結成が相次いだ。早くも1860年代、新聞各紙はこの動きを社会現象として捉えたうえで「ブラスバンド運動(brass band movement)」と呼んでおり、1880年代末にもなると、ブラスバンド専門誌『ブラスバンド・ニュース』(1889年11月)が伝えるように、全国各地に設立されたバンド団体の数は30,000ないし40,000にもものぼったといわれている。統計上の数字については研究者の間で一致を見ていないが、ブラスバンド運動がこういった数字に表わされるほど大規模に拡大したこと、また、この時代に形成されたブラスバンド文化が現代にまで踏襲され、今でも「イギリスらしさ」を象徴するものの一つと捉えられていることは大いに注目に値するだろう。19世紀後半のイギリス社会でブラスバンド運動はなぜこれほどまでに拡大したのか。いったいなにが、どのようにしてブラスバンド文化をその後のイギリス社会に浸透、定着させていったのだろうか。

こうした問題を考えるために、本報告では、まず、19世紀半ば以降に加速化したブラスバンド運動の実態を問うとともに、それがどのように当時の社会動向(具体的にはクリミア戦争やいわゆる募兵を目的としたVolunteer Movementなど)と密接に絡み合っていたかを考えたい。そして、19世紀末に社会に定着しつつあったブラスバンド運動が新たな問題を抱え込みながらどのような展開をみせたのかを明らかにし、それがブラスバンド運動の何を物語っているのかを示唆したいと思っている。

『荒涼館』論—自己を犠牲にする女性の美と不徳—

大森幸亨(京都光華女子大学・非)

『荒涼館』におけるエスタの天使像は、ヴィクトリア朝の家庭的美德の理想像に基づいている。忍耐、従順、優しさ、無私等が尊ばれ、家庭的美德の礎となった。しかし、オールティックが指摘するように、ヴィクトリア朝の一群の家庭的美德は、規範として機能はしたが、非現実的で突かれれば弱い思い込みであった。確かに、分別と同情心を備え、献身的に周囲の世話をするエスタの語りを軸として、私生児を生んだ秘密を抱えて貴婦人として生きるデッドロック夫人や、善良でありながら恋に身を滅ぼすエイダ、訴訟にのみこみ、判決の日を長年待ち続けるミス・フリートや、行儀作法の欠如したキャディなどの女性を配することによって、ヴィクトリア朝社会の二面性を浮き彫りにしている。

エスタは天使像であると同時に、他の女性の観察者、審判という性質を帯びている。「わたしが利口でないことは自分でも知っています。」と述べる一方で、鋭い洞察力と感性、そして時には風刺的な見解で、周囲の女性たちを観察し、評する。つまり、ヴィクトリア朝の理想的な女性であるエスタの判断の中に、美徳と不徳の判断基準がある。エスタを含め、『荒涼館』に登場する多くの女性に共通することは、何かに自己を犠牲にするという行為だ。ただ、その行為が美徳か不徳かは、エスタの判断にゆだねられる。

本稿では、ヴィクトリア朝社会が求めた理想的な女性像と、エスタによって体现されるヴィクトリア朝の家庭的美德の規範を読み解きながら、『荒涼館』における女性の美徳と不徳の境界線を探り、女性たちの自己犠牲の本質を明らかにする。

John Marshall Clemens の死体解剖の理由は？ : Mark Twain と父親

和栗 了(京都光華女子大学)

Mark Twain (1835-1910、本名 Samuel Langhorne Clemens) の父親 John Marshall Clemens (1798-1847) の死体は、Orville Grant 医師か Hugh Meredith 医師によって、あるいは兩人によって、解剖された可能性が極めて高い。Philip Fanning によると、その理由は父親が性病に罹っていたからだという。

だが、父親が“freethinker” だったこと、1840年代のClemens一家がきわめて困窮していたこと、解剖用の死体が金になったこと、死体や解剖がTwainの作品で何度も言及されながらも死体解剖は一度も実現しなかったこと、などを考えると、父親の死体は金のために解剖されたと解釈するのが合理的だ。性病に罹っていたとしたら、遺体はむしろ密かに埋葬されたり、母親Jane Clemens (1803-1890)も感染していたはずである。ところがどうもそうではないようだ。やはり死体は金のために解剖され、そしてTwainもどこかの時点でその事実を知ったのである。

母親に比べ、父親がTwainの作品に与えた影響は少ないと考えられてきた。母親のことは別の機会に論ずるとして、父親も大きな影響を与えた。その一つは、金のためには肉体も魂も売られたという衝撃であり、もう一つは非キリスト教徒の死体は解剖されるという恐怖感であった。

金のためには何でもする人物が地獄に堕ちるとすれば、父親は地獄に堕ちたとTwainは信じたに違いない。ハックの父親やヘンリー8世など、彼の長編作品には地獄に堕ちそうな父親ばかりが登場する。Twainは死体解剖された父親を最期まで認められなかったようだ。彼の苦悩は、聖書に立脚する社会道徳に従わなければ地獄に堕ちるとする道徳や、キリスト教教会とキリスト教徒を厳しく批判する形をとったりした。その根底には、生きるためには父親の死体も売らねばならなかった衝撃と、教会に属していないという理由で解剖を認めたキリスト教教会への不信感があつたと解釈できる。

Twainが誰にも明かすことの出来なかった秘密、つまり非キリスト教徒の父親の死体が金のために解剖されたという事実は、彼の作品においても生涯においても甚大な影響を与えたのである。

講演要旨

サステイナブルな地球と英語、そして母語としての日本語

井出祥子先生（国際語用論学会会長、東北大学客員教授、日本女子大学名誉教授）

大学の英文科においては、英語の文学・言語学を中心として近代化を牽引してきた西欧の文化を学ぶことを行ってきたといえよう。21世紀になった現在、地球の存続を危ぶまずにはいられない局面を迎えており、このような事態になったのは、何が間違っていたためかを問わなければならないという課題に直面している。

日本の大学の英文学科人は、「英語」という今やグローバル社会の共通通貨となっている言語を、外側から、つまり客観的に捉えて考える任務を負っているのではないだろうか。そのような観点から見ると英語は個人主義社会を背景にしており、一方、私たちの母語である日本語は「場・コンテクスト」に依存している言語であるということがいえよう。

日本語に照らしてみると英語はどのような言語であろうか。比較対照で浮かび上がってくる日英語の差異をトータルにみると、そこには、清水博のいう天動説的な視点での言語使用（英語）と地動説的な視点での言語使用（日本語）が見えてくる。地動説的視点とは、いま、サステイナブルな地球のために必要な思考の方向であり、それが日本語の言語使用であることの認識することの意義を聴衆の皆さんと考えたい。